

□企業の、医療の、コミュニケーションの、・・・、再生。再生の前につく事柄は、たくさんある。グループプレゼンを見ていると多種多様なテーマ設定がされていた。こう見ると世の中本来の姿ではない、どこかおかしいものがあふれている事に気づく。再生の対義語は「破壊」。はじめにあげたこれらのものは、すでに破壊されてしまっているのだろう。だからといって、切り捨てられるものでもない。だから我々は再生が必要だと感じる。では一体どのようにして破壊されたものを再生すれば良いのだろうか。そのこたえは、明確な目標を持つということなのだと思う。なんとなく破壊されていると感じ、再生しなければならないと思っても、これらの事柄はどれも本当のあるべき姿など分からない。よって、自分なりの、自分自身納得のいく目指すべき姿をイメージし、それに向け何か行動をとる。というのが、再生への第一歩なのだと思う。

また、再生は、繰り返し利用するというニュアンスで使われることも多々ある。環境問題を考える上で、とても重要なキーワードだ。再生紙は、木を切り倒し続けることを抑制し、再生可能エネルギーは、資源を枯渇させずに利用可能であるため、枯渇性燃料が持つ有限性への対策、地球温暖化の緩和策、また新たな利点を有するエネルギー源などとして、注目され、かつ利用が活発化している。個人プレゼン「江戸エコ～究極の循環型社会～」の中で紹介できなかったものだが、実は江戸の時代というものはエネルギーも完全に循環型であったそうだ。火力は薪を燃やして利用し、菜種油や魚の油を利用したものを明りとしていた。現代では当たり前となってしまっている「使い捨て」は見直され、今一度「繰り返し」な生活をしていくべきなのだろう。

一見再生というと、復活や改善、生まれ変わるといったプラスなイメージを連想しやすい。まさに「これから」といった感じだ。しかし視点を変え、より根本的な部分に目をやると、再生がマイナスなイメージになることもある。今回、グループプレゼンの内容の一部で死亡債を取り上げた。これは、世界同時不況に陥ったウォール街が、その後結局また同じことを繰り返しているのではないかと。「再生」は、「二の舞」になることもあるのではないかと考えたからだ。死亡債は今、アメリカではサブプライムローンに代わる金融商品として期待されている。実際のところ、死亡債は世界同時不況が起こる前から存在していたが、サブプライムローンが焦げ付いた後にこの死亡債の市場が拡大したことも事実だ。つまり、金融商品という大きなくくりでみれば、再生されたものが死亡債であることとらえることもできるのではないだろうか。死亡債というものは、簡単に言ってしまうと「人間が早くたくさん死ぬと儲かる商品」である。いまだ死亡債の結果がどうなるのかは不明だが、直接的ではないにしろ、ついに人間の生命にかかわるところまでやってきてしまった。これまでと全く変わらない金融の世界で、本当に良いものというのは生まれるのだろうか。ウォール街では今、再生ではなく、新生が求められるべきなのだと思う。

□ゼミ活動のテーマを「再生」「Re-」として、この一年間活動をしてきた。「再生」を辞書で調べてみたら7つの意味があった。7つの意味の中で私がゼミ活動に合っていると思ったのは「昔はあったが、今失われているものを再び作り出すこと」という意味だ。だが、以前あったものをまた作り出すのは簡単そうに思えて、とても大変なことだと思う。ここで、考えなければいけないことは「どこまで」、「何を」再び作り出すかということではないだろうか。しかし、「どこまで」、「何を」というように決めてしまったら、つまらないのかもしれない。佐藤ゼミ一員が個々にあるいは全体で行けるところまで可能性を広げるようにしていくという方がいいのかもしれない。また、「Re-」の意味を調べてみると、接頭語で反・後・退・離・再・相互という6つの意味があった。ここでの意味は再である。1つの文字にもいくつもの意味がある。だから、その言葉・文字を聞いただけでは誤解する人もいるのではないだろうか。とても言葉・文字というものは難しいものである。

エッセイを書きながら思ったのだが、私個人で考えてみると「再生」を意識してゼミ活動を行ってはいなかった。一年を振り返ってみると、私はどこを再生し、何を再生してきたのか思い付

かないのである。しかし、「再生」とは違うかもしれないが、ゼミに入った当初と今とではゼミに対する気持ちが変わった。それは、先生、先輩そして同期のみんなが私の何かを変えそういう意味での「再生」をしてくれたのかもしれない。

グループ活動の面から「再生」を考えてみると、グループプレゼンでは「再生」をテーマにプレゼンを行った。私たちのグループは世界遺産をテーマに「脅かされる世界遺産」でプレゼンを行ったのだ。世界遺産には様々な世界遺産があり多くの国に世界遺産があることを知った。また、世界遺産はその世界遺産がもつ魅力などから3種類に分かれているのだ。世界遺産をなぜ作ったのか。それは、建物や風景が普遍的な価値を有するものであるため、人類共通の宝物として全人類で守っていこうということからだそうだ。しかし、調べていくとその世界遺産が今では落書きや観光客によるゴミなどで危機遺産になる遺産もあるということを知った。世界遺産は人類共通の宝物であったはずである。なぜ、危機遺産というものになってしまう遺産が出てきてしまったのか。それは私たちが本来の価値を知らずに自分たちのことだけを考えているからではないだろうか。私たち全員が、世界遺産の本来の価値を知り行動を見直さなければいけないという意味で「世界遺産」をテーマに「再生」を取り入れながらプレゼンを考え発表した。そして、他のグループもみな同じような「再生」の取り入れ方をしていたように思う。

これらのことを含め、私たちが「再生」しなければいけないものは多くあるのではないだろうか。挨拶、言葉遣い、マナーなど。これらを「再生」することは難しいことだとは思いますが「再生」して行かなければいけないのだ。「再生」することに成功したら次に維持をしさらに良いものにしていかなければいけないと思う。私たちは常に「再生」し変化していかなければいけないのかもしれない。

□今思えば昔は泥だらけになったり、水を浴びてびしょりになったりして体中に傷をつけていた。最近では外で走り回ってけがをする機会がなくなって、たまに怪我をすると小学生のころに比べて治りが遅くなったなと思う。かさぶたがはがれ落ちて一見治ったように見えても、なかなか消えない傷跡がやっかいなものである。

今年度のゼミのテーマ「Re-:再生」と聞いて、私の頭の中で最初に思いついたのが「傷」だ。Reuse、Recycleなどもすぐに連想された。これらの言葉は再び誰かの手に渡って活用されたり、違う方法で再び活用されたりすること、つまり「再び生まれ変わる」とひとくくりでできることだと思った。まるで私たちの身体の一部で起きていることと似ているのではないかと思ったのだ。

テーマに沿ったゼミ活動の一年を通じて「再生」の現場を様々な角度からみてきた。サブプライムから発生した世界経済の崩壊、私が見て見ぬふりをしていた間に日本中で広がった社会的排除の浸食、フィンランドと対峙して見える日本の衰退した教育現場や不透明な社会保障、その社会保障の現状と将来への展望など、読書会を中心として日本の、そして我々の現状を見つめなおし、これからどうあるべきかを模索していった。どの読書会においても、すべての国民が納得するかたちで政策を行っていくべきで、そのためには今までの現状を見直し不透明さをなくしてすべての国民が理解できるような体制を国が整えることを目標に掲げ議論が進められていたと思う。経済の崩壊がなぜ起きたのかを国民が理解し新たな経済活動を行っていくこと、社会的排除の現状をしっかりと国民が目を向けることによってセーフティネットの体制を見直すこと、フィンランドのような教育における先進国とを見比べることによって日本の教育現場を新たな改革や方針へ導くこと、不透明な日本の社会保障の透明性を高めることによって国民に社会保障に対する理解や安心度をもたらすことを目指してきた。グループプレゼンも同様に廃止に追いやられる地方空港の現状や重要性を見つめなおし、再建への新たな道を模索した。

私たちは今までの政府や我々国民が残してきた傷跡をどのようにして癒すべきか、そして今後

新たな傷をつけないためにもどのような政策や行動をとっていくべきなのかを議論してきた。即急に傷を癒すことは大事だが、私がこの一年を通じて大切なことは今後新たな傷をつけないためにどのようなアプローチをしていくべきかである。どの諸問題においても残された傷は古くなるほど癒えにくい。時代の流れが速くなる今日において「再生」が追いつかなくなっている。今後「再生」の現場が発生するのであれば、快適な現場をベストに近付けるためにその現状を見つめなおし高みへのステップとして「再生」が行われるようになっていければ良いと思う。「再生：Re-fresh!」で明るい未来を手に入れたい。

□再生という言葉には多くの意味を持っている。一度弱くなってしまったものを再び強くすることば。脆くなったものを、崩れてしまう前に作り上げることのできることば。自ら負の連鎖を断ち切り、より強固なものへと変化を与えることば。この一年、「再生」ということばのもつ意味を考え続けてきた。各々の考える再生は少しずつ、少しずつ違う意味を持ち、世界中には多くの再生できるもの、再生すべきもの、そして再生され続けているものがあるように感じた。

身の回りで、「再生」という言葉を目にすることが多くなった。これは、私がこの言葉に敏感になったからであろうか、あるいは現在再生を必要としている事象が多くなったからであろうか。今まで再生を必要としてきた現実も多くあったのかもしれない。しかし、私たちはそこから目をそらして気づかなくなったのではないかと私は思う。そして今、世界中で起こった様々な現実を受け止めなければならなくなり、現実を目を向けざる負えない状況に陥ったのだ。私は、ニュースを見るときも、新聞を読むときも、そして書店に並ぶ大好きな本を読むときも再生ということばを目にした。例えばオバマ大統領の奏でた「アメリカ合衆国の再生」、民主党へ政権を譲ることとなった自民党が発した「自民党の再生」、ゼミ内でグループ別に考えた「身の回りや世界規模での再生」などが挙げられる。私が耳にした再生は多種多様である。また、これらをふまえた上で私は再生とは、何事にも繋がることであり私たちも常に意識して行うことができるものであると思う。

この言葉を考える上で、一つに世界中の国家や政治家の行う再生というものがあつた。これらは一度壊れてしまったものを、新たに別の形でよりよいものとしてつくりあげるものだと思う。また、創りあげなければならないものでもあり同時に、敢えてそれらを自ら絶った上で新たなものを作り上げていくことも可能である。

そして、二つ目には現在の我々の日常活動に再生をあてはめて考えてみることも大切であると感じた。私たちの活動上では、失ってしまってから気づいても遅い。無くなってしまう前に危機感を持ち、よりよいものへと達する努力をすることも必要ではないかと考えた。

再生ということばは多くの意味を持つ。私たちはこれから多くの再生を必要とする現状に直面するだろう。今、世界にとってどのような再生が必要か、日本にとって誰が再生を必要としているのか、私たちの生活で再生すべきことは何か。再生ということばのもつ意味についてこれからも深く考えていきたい。

□私は最近『京都の「葵プロジェクト」、第1回「プロジェクト未来遺産」登録』という記事を読んだ。この記事の内容は、日本ユネスコ協会連盟が12月1日に登録を決定した第1回「プロジェクト未来遺産」に、京都府の「葵プロジェクト」が選ばれたというものであつた。「プロジェクト未来遺産」は、地域の文化や自然遺産を未来へと守り伝える活動を日本全体で応援していくことを目的とした事業であり、地域の文化や自然を守り、継承し、まちづくりに生かしていることなどの理由から「葵プロジェクト」が選定された。この「葵プロジェクト」は、環境変化により京都三

大祭りの一つである「葵祭」に必要な葵の自生地が激減していることを受け、一般市民や学校に「二葉葵」を育成する協力を求め、自然と文化のつながりについての意識啓発を図りながら「葵祭」を次世代へ継承する活動を行っているものだ。

私はこの記事を読み、伝統を守るという視点から考えた。「葵祭」は京都三大祭りの一つであり、平安時代では貴族を中心とした朝廷行事であった。そして江戸時代に再興されて以降、現在では町おこしや毎年の恒例行事としての色が強いだろう。この祭は時の経過とともに姿を変えてきたといえる。現在と過去では、文化や生活スタイルなど、ほとんどが異なっている状況である。そのなかでこういった伝統を守るこの意味はなんだろうか。それは、やはりそこに学ぶべきことがあるからではないだろうか。過去にあったものを現在に「再生」することは、現在の私たちに何らかのプラスの影響を与えてくれるのではないだろうか。

しかし、過去のものはそのまま現在に適用されるわけではない。葵祭の例からも、祭りの目的は現在と過去では大きく異なる。過去のものを現在に適用するようにしなければ、そのものは人々に受け入れられることなく無意味なものになるであろう。つまり、過去のものと全く同じものを「再生」することは不可能なのではないだろうか。時の流れとともにその時々に必要なものが変わってくるのは当然のことだ。その時々に必要なものへと形を変えていかなければならないはずだ。「再生」したものを享受する側は、時が経てば大きく求めるものが違う。葵祭の例でいえば、平安時代と現在では、大げさかもしれないが大きく異なる。「再生」とは、名ばかりであり、ものごとの本質を見つめ直し、不可逆性を帯びた、新しいものへの転換なのではないだろうか。

「再生」とは進歩のための一つのツールなのではないか。それは、過去に学ぶべきものが多く存在し、現在の私たちに多大な影響を与えるからだ。元々存在した過去へのものへとただ還るのではなく、新しいものを創ることこそ「再生」の本質なのではないだろうか。自分の過去にも学ぶべきことはたくさんあるだろう。もちろん過去と現在では自分というものは大きく異なる。今自分に必要な何かを「再生」することによって、自分をさらに高めることができ、成長することができるはずだ。「再生」を通して自らを見つめ直し、さらに成長していきたいと感じた。

□再生。これは去年私達が一年間を通してゼミ活動のテーマとしてきたものだ。再生と聞けば、近年日本では経済再生が叫ばれているし、ES細胞の再生医療なども注目を浴びたことは記憶に新しい。再生には音楽や映像を出力するという意味もあるが、その意味の根底にあるのは元あったものを再び作り出すことである。失ったもの、一度目の前からなくなったものを再び元に戻すこと。私は以前から、その再生という言葉の響きに何か立ち入ってはいけぬ、少し離れたところにあるような不思議な印象を持っていた。

普段、私達は何かを再生しているだろうか。私は今までに意識的に何かを再生してきたつもりはない。しかし、人間は生きているだけで様々なものを再生しているのではないだろうか。なぜなら、人間はそれぞれが生きた時間を通じて時代というものを再生しているのではないかと考えるからだ。「時代を再生する」と聞いて疑問に思う人も多いと思う。最初に述べたように再生とは元あったものを再び作り出すことである。そのため、時代を元通りにしてしまったら人間はここまで進歩することは不可能だったのではないかと考える方が一般的かもしれない。しかし、再生という言葉にはもっと深い意味があると思う。私は、再生して元あったものを再び作り出す、そしてその際に元あったものをそれ以上の段階へと導く、それが再生という言葉のもう一つの意味だと考えている。人間は日々、様々なものを再生している。それは、皮膚や髪の毛、爪など体の一部の小さなものから、政府が経済を再生することを求められているように大きなものにまで多岐にわたっている。例えば、些細なことがきっかけで険悪になっていた友人と再びお互いを認め合って交流をし始めることも人間関係の再生と言えるのではないだろうか。そして、その全て

の再生に共通していることが再生することで再生をする前より一步進んだ段階に踏み込めるということだ。たとえ怪我をしてしまい以前のように体を動かすことができるまで身体の再生ができなかったとしても、それは新たな段階に踏み込んだだけで決して後ろ向きに捉えるべきことではないと思う。人間は何があっても再生を繰り返すことで次の段階へ進み続けることができる生き物なのだ。

私がこのエッセイを書いたことで行き着いた結論は、「時代は人間が日々再生を繰り返すことで生まれる」ということだ。私は去年、再生という言葉にしっくりとくる答えというものが見つからずもやもやしていたが、エッセイを書いたことで少しすっきりした気がする。意識的であっても無意識的であっても人間は再生を繰り返すことで次の段階へ進む。私もゼミ活動の中で、今までの1年を振り返り頭の中で「再生」しながら自らのゼミ活動というものを「再生」していきたいと思う。

□この1年間「再生」・「Re:」というものをテーマにゼミ活動をしてきた。後期には、「再生」・「Re:」をテーマにグループプレゼンをやった。そのため、前期よりも「再生」について考えるようになった。まず「再生」とはどのような意味なのか。について自分なりに考えてみた。私は「再生」とは、崩壊しつつある土台を再構築し、過去にあったものより進化したものを生み出すこと、または過去のうまく機能していた状態に戻すことではないかと思った。グループプレゼンでは、地方空港、世界遺産、コミュニケーションなど、各グループが様々なものを「再生」と関連付けてプレゼンをしていた。他のグループのプレゼンを聴いて、たくさんのももの基盤が以前と比べて崩壊しつつあると感じた。コミュニケーションのプレゼンを例に挙げると、最近携帯電話やパソコンなどといった電子機器が発達していることで、携帯電話などが普及していなかったときに比べて、面と向かって話す機会が減ってしまっている。ここでもコミュニケーションという分野での土台が過去に比べて崩壊しつつあると感じた。このように現代において「再生」が必要なものが、たくさんあると改めてわかった。

私たちのグループは「航空自由化」と「再生」を関連付けてプレゼンをした。最近、日本航空の企業年金問題や航空自由化など航空業界はメディアを通じて多く取り上げられている。そこで、私たちのグループは航空行政の問題を挙げた上で、航空自由化について述べていった。まず、航空行政には無駄な地方空港の作りすぎや不平等な日米航空協定、ナショナル・フラッグキャリアとしての政府からの負担など、今の日本の航空行政には様々な問題があることがわかった。そこで、私たちのグループは、航空自由化をすることは反対ではないが、航空行政の基盤が整っていない「今」航空自由化をするよりも、基盤をしっかり整えた上で航空自由化をすべきであると考えた。それは、まず基盤である行政の環境が整っていないまま企業に託してしまうのは問題であると考えたからである。

これは、航空自由化に限らず様々なことにも共通していえることだと思った。私は、土台が整っていない状況で新たなことにチャレンジしてもうまくいくはずがないと思う。建物にしても勉強にしても様々なことにおいて言えることであると思う。勉強を例に挙げると、基礎ができていない状態で次のステップに進もうと思っても、理解することもできず、力がつくはずがないと思う。このように、なににおいても「基盤」というものは必要不可欠であることが改めてわかった。現代の日本は医療や機械などあらゆる分野で発展し続けているが、これらは基盤がしっかり整っているからこそ成長してきたものだと思う。今後は、まず崩壊してしまった土台を「再生」してから、新たなステップに進むべきだと感じた。この一年のゼミ活動を通じて「再生」というものの必要性を改めて感じた。

□現行する社会は「崩壊」と「再生」の繰り返しによってその存在を形付けてきた。そして、その二つに関与しているのは言うまでもなく我々「人間」である。人間の欲望に対する「愚行」と「英断」によって社会は創造されてきたのではないだろうか。

私は「再生」という言葉を耳にすると常に考えることがある。それは、「再生」の前提には必ず「崩壊」があるということだ。もちろん、これは当然のことなのかもしれない。なぜなら、人間は何か失われるものがなければ、それを再び取り戻そうという気持ちにならないからだ。社会の「崩壊」には人間の欲望である自己の利益を優先し、その利益を高めずにはいられないという本質が絡んでくる。常に人間はこのことに催眠術にでもかかったかのように心を支配されている。そしてそれは、心を盲目にすることで大切な何かを音を立てて崩れてしまっても決して気づかせることはさせないのである。中には、この催眠術にかからない人間もいるかもしれない。しかし、これまで形成されてきた社会の変遷を見れば、圧倒的に催眠術にかかった人間が多く存在し、社会の「崩壊」に影響を与えているように思える。私が、注目したいのは「崩壊」の後、この催眠術が一時的に解けるという事実である。自己の利益のために大切であったはずの何か失われ、そのために生じている多くの犠牲を目の当たりにすることで「愚行」を初めて認知する。そして、その「愚行」を認知することで人間は望ましい社会を目指そうとする。だから、「再生」という欲望が実現するのではないだろうか。つまり、「再生」とは犠牲を原動力に働くものではないかと私は思う。このように考えると、人間という生き物がとても悲しく、哀れな生き物のように思えてならない。

我々が望む「再生」された社会とはこのような「愚行」を認知し、犠牲の上で成り立ち、それを糧にするような人間集団の塊であってよいのだろうか。私は、決してそうは思わない。なぜならそれは、結局は「崩壊」を生み出し、これまでと変わらない偽りの望ましい社会の「再生」だからである。では、真に望ましい社会の「再生」とは何か。それは人間の利己的な欲望によって犠牲を生み出さない社会を再生産することである。つまり、我々人間が利己心によって支配されるのではなく我々人間が利己心を支配すればよいのである。たしかに、人間の本質ともいえる利己心を支配するということは困難なことのよう思える。しかし、それは決して不可能なことではないだろう。前述したように必ずしもそういった人間がいなくてもいいと思う。少ないかもしれないが間違いなく存在するはずだ。それならば、我々人間はこの難題に立ち向かわなければならぬだろう。なぜなら、我々はもう知っているはずだからだ。大切な何かを失うことの辛さを、悲惨にも犠牲になるもの尊さを、そして何よりも欲望に支配されている自分に耐え難いことを・・・。

□今回のテーマである「再生」という言葉の根幹にある意味は、「死もしくは仮死状態から再び生の状態に変化する」という事と「変化を経ることでより良い状態に変化していく」という事の二点にある。

一つ目の死から生への変化という意味が根本にあるため、「再生」という言葉は、生き返るという意味の蘇生、再びこの世に生まれるという意味の再誕というなじみのない意味をイメージし易い。しかし、この意味を持つ「再生」という言葉は日常でも使われることがある。それはビデオやテープを「再生」といった play という意味での「再生」だ。ここではビデオやテープの中に保存された死の状態の情報を機器に通すことで、再び生の情報に変換するという意味で使用されている。これと同じ「再生」という意味はビデオやテープの情報を変換するという事だけではなく、人の記憶についても使われている。心理学用語で「再生」という言葉は再認つまり思い出すという意味で使われている。脳内に保存された記憶が、再び思い出すことで生きた記憶になるという事だ。人間の頭の中でも、「再生」という記憶を一度死の状態にして、再び生の記憶

に戻すという複雑な変化を日常的、無意識的に行っている事は面白い仕組みだと思う。だが、記憶の変換だけを頭の中で行っているわけではないと思う。

そこで、「再生」という言葉を見つめ直してみるともう一つ共通するものが見られた。それが二つ目の意味である「再生」の過程を経ることで、よりよい状態のものへ変化することができると思う。例えば蘇生や再誕といった意味の「再生」の過程を経てしまうと以前とまったく同じ状態に戻るのとは不可能である。以前の状態と酷似していても同じ状態ではなく、全く別物になってしまう。しかし、その変化はネガティブな意味のものではなく、より高次元のものに変化している。この意味の影響を強く受けているため、「再生」には更生という意味も持っている。この変化は蘇生、更生といった意味の「再生」だけではなく、人の記憶の「再生」にも同じ意味を持っている。人が何かを経験し記憶したものと、記憶したものを思い出す時ではその量も質も変化し、元の経験と頭の中の記憶は違うものになっている。こちらも改悪というわけではなく、必要な情報だけを状況に合わせて編集、他の経験をフィードバックすることで、より正確な記憶にするといった改善が行われている。このことは自分が考える「再生」という言葉が持つ最も重要な意味だと思う。

記憶の「再生」を行うことで、改善された記憶に変化すると述べてきたが、その反面危険性も秘めている。必要とされる情報に合わせて自分の記憶をゆがめて利用してしまうことや経験が不足しているために十分な検証ができずに精度の粗い記憶になってしまうといった恐れがある。記憶の「再生」が持つ意味を生かすには出来るだけ多くの経験を重ね、参考や検証材料となる記憶を増やしていかなくてはならない。そして、記憶の「再生」には特徴がもう一つある。それは、記憶の「再生」は何度も行える。だからこそ「再生」を重ね、より記憶を磨き上げていかなくてはならない。

□ゼミの1年間のテーマが「再生」であり、ゼミ活動を通して色々な場面で「再生」を考える機会が多く用意されていた。そして、今回のエッセイの課題も「再生」である。「再生」という言葉は抽象的でなかなか難しく感じられるが、考えてみるとその言葉には様々な意味が含まれているように感じた。例えば、世界経済危機によって影響を受けた金融市場の再生、日本経済の景気の回復、壊れた物や制度などを元通りにする、本来の姿を見つめなおし新しく作り変えるという意味や負の連鎖を繰り返すといった意味などである。後期のグループプレゼンも同様のテーマで行われ、各グループは金融市場、世界遺産、失敗の再生産、航空関係、コミュニケーションというようなそれぞれ違った分野であったが、その中でほとんどのグループに共通していたのが、本来の姿を見つめなおし新しく作り変えるという意味での「再生」ではないだろうか。

そこで、具体的な事で当てはまるものがないだろうかと考えたときに真っ先に頭に浮かんだのが、1年間通して学んできたことである日本の社会保障制度である。社会保障制度と一括りに言っても(1)最低所得保障制度、(2)社会手当、(3)年金制度、(4)就労支援制度、(5)医療保障制度、(6)介護保障制度、(7)子育て・子育てを支援する制度、(8)住宅保障制度などと別れている。読書会で使用した「希望の社会保障改革」によると社会保障制度の基本的な目的は、「市民相互の連帯によって支えられた国・自治体・地域が、すべての市民に品位ある生活を保障し、さらに各人がそれぞれ自律した生をおくことができるよう支援すること」であるとされている。しかし、現在の日本における社会保障制度はこの目的を十分に果たしているとは言えないのではないと思う。なぜならば、社会保障を必要としている全ての人に行き渡らず最後のセーフティーネットとしての役割を果たしていないからである。特に、それが顕著に現れているのが生活保護制度である。例えば、最低生活水準を下回る生活をしている人が生活保護を利用したくてもその認定基準が厳しいため、生活保護を利用することができていない。つまり、生活保護を必要としている人は多数いるにもかかわらず、利用できる人の数は少数なのである。このような

制度では本来の役割を果たしているとはいえないのではないだろうか。現在の日本の社会保障費は他の国と比較しても少ないため、急に保護を手厚くすることは難しいと思われるが、これから、さらなる高齢化社会を迎えるにあたって社会保障制度を見直すことは必ず必要になってくると思われる。もう一度政府は社会保障制度の本来の目的や役割を再確認し、必要なときに必要な人が受けることができるような制度に、新しく作り変えるべきであると思う。

今後の日本にとっても様々な分野でこの「再生」という言葉がキーワードになってくるのではないだろうか。

□予想はしていたけれど、レンジで温めたコーヒーからは、香りや風味が見事に消えていた。カップの中にあるのは、煎ったコーヒーの豆の味がする黒くて熱い液体である。コーヒーの定義としてはこれで充分。でもこれは朝飲んだコーヒーと違う。再生に関する二つの違いについて考える。〈再生することと時間を巻き戻すこと〉〈再生することと再生させること〉。

当たり前のことだが再生したとかげの尻尾とオリジナルの尻尾は違う。再生した尻尾はもう一度生えた別の尻尾である。そこに別の尻尾が生えていたという過去が存在する。再生はコピーじゃない。心理学では再生のことを再認というそう。過去に経験したものを思い出すこと、再生するということは過去とつながることだ。家族はたしかに血縁というつながりもあるが、過去を共有しているという意味でもやはりかけがえのない存在だ。再生が過去とつながることだとすると、非正規雇用が蔓延する日本には再生の能力はないかもしれない。短期的でつながりが弱く、入れ替わりの激しい非正規の仕事は過去とつながるほどの重みがない。マニュアルでつながれた社会に過去はすでに存在しない。どうして日本の文化が若者に定着しないか違和感はない。若者を、進歩への意欲がないと批判する社会に違和感がある。伝統を守らなくてはならないのは再生するため、外国人に紹介できるようにするためじゃない。我々の時代は違ったなどとよく言う過去に憧れる大人は、再生の能力を失いつつある社会から目をそらしているだけだ。彼らは社会の再生を望んでいるようだが、憧れることとつながることは違う。不可逆性。新しい尻尾はオリジナルの尻尾とは違う。

再生するが再生させるに変わった瞬間、いっそう容易ではなくなる。なぜなら再生はあくまで現象であるからだ。とかげの尻尾が再生するのはとかげがもう一度生えろ、生えろと念じているからではなく、ましてや研究者が薬をつかって故意に行うのでもなく、ただ尻尾は再生する。再生させることができると傲慢な考えをもってはいけない。何かのためだとしても、みんなのためだとしても、再生させることはおこがましいと思われることは大いにある。だから、それが自力で再生するまで待てばいいのだろう。問題は、尻尾を自切し何度も再生を試みて自力で再生できない程弱ってしまったとかげ。尻尾のないとかげ。そこに現象が起きない限りそれが再生できないのはやっぱりおかしい。しかし、手助けだといいいながらよそから持ってきた別のトカゲの尻尾をつけようとする者がいるし、再生の手助けをするという者が実はとかげの尻尾を切断した張本人であったりする。再生は、たぶんそのとかげにしかできない。大事なことは、とかげが再生を諦めてしまうまえに、えさを与えること。辛抱強く、見続けること。3日坊主でもいいから自分で再生しようとするとかげをちゃんと見ることだ。3日坊主も3回繰り返すことができたなら、9日坊主だ。ちゃんと見て、評価する。とかげのモチベーションを上げることくらいなら出来るかもしれない。

時間は巻き戻せない。が、再生はさせられるようなものではない。

□「何かを壊すことは簡単だ。でももとに戻すのはもっと難しい」

人類の歴史は破壊と創造により再生されてきた。いや進化と言ったほうがいいかもしれない。その進化がやがて革命を起こす。Evolutionが”Re”volutionになる。

人間だから間違いを犯すこともある。そのことで多くのことを悩み、苦悩する人もいるだろう。一方で長い暗闇の心理状態であっても、あれこれと考えて活路を見いだすことができる人間もいる。だれしものが脳を持っている。両者は思考のベクトルが違うだけで、過程における差はないと思う。

過程は同じでも結果は違う。結果を出せなかったものは歴史には残らない。だから、先人に学ぶべきポイントはそこにある。歴史は結果を知っている。私たちは過去の負の遺産を再生させて螺旋させるのではなく、私たちはすでに先人たちが生涯をかけて研究したものを学ぶことができているのだから、知恵を絞り進化へと昇華させなければいけない。例えば技術の進化。私たちは20年前の暮らしとは全く違う生活を送っている。20年前は携帯電話もなかった家電もここまで進化していない。社会インフラもここまで発達してなかった。20年前、世の中が今のようにこんなに便利になると想像したのは、ごくわずかの人間だけだと思う。世の中の物や人が進化することによって社会はゆっくりとその姿を変え始める。

最初にもどって「何かを壊すことは簡単である。」でもなおすことは本当に困難なんだ」例えば、信頼を壊すことはできる。裏切ればいい。だけど一度失われた信頼を再生させることは難しいだろう。もしくは言葉。一度言葉が発せられるとその言葉は文章とは違い直すことはできない。言葉によって人は良い方にも悪い方にも何かしらの影響を受ける。どちらかの影響を強く受けすぎるとニュートラルな状態に戻すことは難しくなる。

社会というあやふやなものに対して無関心になってはいけない。なぜなら社会が牙をむき、だんだん私たちの心のなかへ浸食してくる。世間がそれを許さないとかそういう空気だからしょうがないなど。許容性を持たなくなりつつある社会は人が本来持っている才能を潰してしまう。例えば、アスペルガー症候群と呼ばれる人達の中には素晴らしい才能を持っている人もいる。しかしながら、この症状に理解がないと発達障害だからしょうがないでしょとして区別する。社会全体がそういう空気を醸成する。そしてその人の能力を潰す。社会が許容性を持たなければ、社会は硬直化して人の可能性を潰す。

ここまで、破壊や進化などについて述べてきた。私自身一度社会への関心を閉ざした時期がある。そのときはやれやれと社会を憂いた。私はまだ幼かったので、私は社会への関心よりも別のところに関心を抱いた。今は違う。この社会がいやならば変えれば良い。それは内からでも外からでもいい。そうした流れが社会を変える小さなうねりへと繋がる。以前と比べて社会に対して発言をすることが容易になった。そういう流れを作り出すこともできる。

もとに戻すという意味での再生ではなく、刷新するという意味での再生を。それがうなりとなって社会を変革していく。破壊から進化。そして変革へ

□今年が人生の節目の年になると思う。これからの日々を思うと気が重い、打ちひしがれてもすぐに切り替えて普段の自分に「再生」をしたい。

再生というテーマでプレゼンをしたときは、「同じ失敗を再生産しない＝同じ失敗を繰り返さない」ということを主張した。主張の手段として失敗を「認識する」ということを話したが、根暗な私は認識するとき失敗したことに落ち込んでなかなか切り替えができない。認識しても打ちひしがれて再び行動に移すことができなければ意味がないと思う。また、失敗したときだけではなく、人の言動でストレスを感じるとそれがフラッシュバックしてずっとイライラが止まらなくなってしまう勉強に集中できないことがあるので、まっさらな気持ちの自分に再生し勉強に励みたいと思う。

良い行いは「再生」を繰り返し、習慣化し継続していきたい。継続は力なりという言葉がある

が、私は継続することがなかなかできない。今年はこれは良いことだなと思ったら何度も繰り返していきたい。

プレゼンをするにあたって再生とは、人とは、失敗とは、欲望とは、と色々なことを頭がぐちゃぐちゃになるほど考えた。その結果「良いこと」と「良くないこと」にきっちり線を引くことはできないのだということを思った。先ほど「落ち込まずに切り替える」と述べたが、「落ち込むこと」は見方を変えると良いこともあるのではないかとお正月ボケした頭でふと考えた。人が落ち込んでいるときに「落ち込んだ時の自分」を「再生」し、その時自分が何をしてもらいたかったか、何を言ってもらいたかったか、あるいはほっておいてもらいたかったか、を考え同じ状況に置かれている人に手を差し伸べたりあるいは陰で見守ったりすることを「落ち込んだ時の自分」は「再生」を通して生み出すことができる。一時点では「良くないこと」も必要な時に「再生」することで有益になる。失敗を人のために使う、これこそ失敗を成功のもとにするということなのかなと思った。

□このエッセイの課題を出されてから約一カ月、僕は「再生」について思い浮かべることを「考えるノート」という自由帳に事あるたびに書き続けていた。これは6ページに渡っているのだが、しかしなかなか書こうと思うテーマが現れなかった。その点で今回のエッセイは今までの課題の中で一番苦労した製作になった。

今回は「再生」という概念についての話をしたいと思う。再生という言葉を知ると多くのことが考えられる。過去のもの、全く同じように復元すること。失った部分を取り戻すこと。あるモノから新しいモノを作り出すこと。「失敗」からやり直すことなど、「再生」という言葉からは多くの意味を連想することができる。しかし再生という概念を考える機会はありません。少ないのではないだろうか。

私は、再生とは生まれ変わることだと考える。変わるということが大事なのである。再生という言葉を使って、あるものを同じように復元しようとするのは果たして最善のことなのだろうか。最近「再生」という言葉が耳触りの良いものとして安易に使われ、善悪を抜きにし、復元する流れがあるように思う。失われてしまった良かったモノ・コトとして、良かったという過去の記憶で再生することは、あまりにも杜撰な行動だと思う。良かったモノ・コトは良かったモノ・コトとして理解することは大事ではあるが、時というものは常に進み、環境は常に変化する。それに合わせて「再生」を行っていかなければ、常に未完成・最善でない「再生」が行われてしまうと思う。そこで重要なことが「変える」ことである。変えることには、変えないことよりも予測不能なリスクがつきまとう。しかし「変える」ことで、また新たなモノ・コトが見える機会が増えるというのも事実である。「変える」ことで期待したモノが得られないこともあるかもしれない。しかし「変える」ことで今までであったモノとは違う視点で見られることもできる。それによって過去の悪かったと思っていたことが良いモノに変化したり、利用できたりするのである。人間は常に進歩しようとする生物だ。そのためには常に変化が必要である。その変化は結果的に進歩という点からは、後退となるかもしれない、がそれ以上に大きなモノを得られると私は考える。

私にとって「再生」とは生まれ変わることであると言った。特に「変える」ということを中心に話を進めてきた。しかしこの「変える」ということには、同様に「変えない」ということにも同じことが言えるだろう。「変えない」ということも「変える」と同じだけ勇気のいる作業である。ただ「変える」ことを行わなければ「変えない」ことを理解することは出来ない。その点で私は「変える」ことの方が重要であると考えた。

今回は進歩史観的な意味合いの強いモノになったが、「再生」は単に復元するものではなく、再び生まれ変わるものである。私も常に「再生」し続けたいと思う。

□日本には「再生」させなければならないことが多過ぎるのではないだろうか。地方の困窮、少子化、雇用における様々な問題、年金問題、国際競争力、教育・・・等、問題を上げればキリがないように感じる。今までゼミで取り上げてきたテーマで「再生」という言葉が使用されていなくても、日本における社会問題や制度を今一度見直すべきである、という文献を読むことが多かった。また、グループプレゼンの際にDグループは、地方空港全体の9割が赤字であるという現状に注目して、そこから「再生」させるにはどうするべきかという構成で発表をした。「再生」させるには、莫大な費用や時間がかかったりするので、空港職員の並々ならない努力によって今は何とか持っている、という状態であり、今後も着陸料を下げたり路線誘致を積極的に行わなければ厳しい状況だ、ということを知るプレゼンすることができた。

しかし、制度や産業構造を変えることによって解決される問題もたくさんあるだろうけれど、日本人自体は「再生」できず、日本の問題の根本が変わることはないのでは、と思う。例えば、年末年始に設置されていた公設派遣村では、就労活動用に渡された現金を、入所していた人の多くが支給されたその日に、お酒やタバコの購入費に充ててしまっていたことがニュースになっていた。確かに今まで辛い生活をしてきた人々に現金をいきなり渡してしまったら、お酒やタバコでストレス発散したいと思ってしまうだろう。現金で渡してしまった政府の責任かもしれない。しかし、派遣村に来ていた人の中の1割程しか就労活動を行っていなかったこともニュースで取り上げられていた。子ども手当でも、もしかしたら政府の意図するように使われないことの方が多いかも。お金で解決出来る問題ではないし、制度がしっかり定められても人が変われるわけではないと思う。人自身も再生される必要があると強く感じた。

長い間集団行動をしてきたせいも、「長いものには巻かれろ」だったり「出る杭は打たれる」というような流れやすい風土の日本で、この精神を変えることは難しいだろう。数ある問題の根本に居るのは、社会を作っている私たち「人」だと私は思う。今までの頑固な日本人の考え方を止めた柔軟な社会こそ日本再生の「鍵」になるのではないだろうか。

□今年のゼミのテーマは「再生」であった。読書会の本にも「再生」という考えが根底にあり、また個人、グループプレゼンを行う際にもそれぞれがこのキーワードを絡めて発表していたと思う。他の人のプレゼンを見ていて思ったのは、再生というキーワードをテーマにあとは自由にプレゼンを行っていたが、人によってテーマの解釈が想像以上に違っていたことが興味深かった。いかにも「再生」がテーマのプレゼンをやる人がいたり、ひねって大きな目線から「再生」を問うプレゼンがあったりして、自分では考えつかないような解釈で語る人もいて見ておもしろかった。

一年前、今年のゼミのテーマであるこのテーマが発表されたとき。自分は「Reduce・Reuse・Recycle」という言葉が即座に頭に浮かんだことを覚えている。なぜこの言葉が頭に浮かんだかというと、自分の好きなアメリカのシンガーソングライターの歌の一部が頭の中で流れたからだ。「The 3R's」と名付けられたこの曲は、ある子供向けアニメの映画のために書かれた曲の一つであり、簡単に言うと、子供たちに「Reduce・Reuse・Recycle」の大切さを説いている曲である。この曲に「Reduce・Reuse・Recycle」続くリフレインがあり。そのメロディが頭に浮かんできた。歌詞の内容は、「この3Rを心がけて、地球と仲良く暮らしていこう」と子供たちに語りかけている。この3Rという言葉、日本でもよく耳にする。「エコ」という言葉がはやり始めてからさらに耳にするようになった。最近ではエコな人＝カッコいいとなるほどエコという概念が浸透しているようである。この3Rはエコの大前提の考えである。最近では前二つのReduceとReuseに重きが置かれているが、「再生」というキーワードで考えるとき最後の

「Recycle」が重要になってくる。環境破壊が叫ばれている現在はリサイクル（再循環）ができていない社会であるといわれている。ゼミ生のプレゼンでもあったが江戸時代には循環型社会が確立され、自然とも上手く折り合いをつけて暮らしていた。一方、現代社会はリサイクルが上手く機能してなく、自然とも共存できていない。考えるに、社会は循環しながら成長している。経済も色々な物事が循環しながら動いているのだと思う。現在の社会がうまくいってないのも、循環の流れがどこかで止まっているのが原因なのではないのだろうか。そう考えると、人間の歴史も循環の繰り返しである。彼が歌の中で子供たちに3Rの重要性を説くのは私たちが考えているより有意義なことかもしれない。

□算数で分からないところがあれば、分かるようになるまでお母さんに教えてもらう。逆上がりが出来なければ、休日、お父さんに公園で練習を見てもらう。分からないことはそのままにしておくな。出来ないことは絶対に出来るようになりたかった。私は分からないこと、出来ないことに対して「諦めない子」であった。

しかし、3・4年くらい前からだろうか。私のそんな性格は少し変わってしまった。「諦めない子」であった私が、物事を諦めるようになった。つまり、分からないこと、出来ないことは諦めてしまう方が楽だと気付いてしまったのだ。今では、分からない、出来ないと思えば、「諦める」という選択肢がすぐ頭に浮かんできてしまう。

ゼミのメニューにあるミクロ・マクロ経済学。説明を聞いていて分からないところがあるとする。昔の私＝「諦めない私」だったら、その分からないところに付箋を貼り、後で様々な方法で理解しようとするだろう。ところが、現在の私＝「諦めてしまう私」は「これは難しい、理解できない！」と割り切ってしまうのだ。実際に、ゼミでやったミクロ・マクロ経済学は、未だに理解出来ずにいる部分ばかりである。

最後まで諦めない、ストイックな人を特に尊敬してしまう。現在の私は、昔の自分でさえ尊敬してしまう。尊敬しているばかりでは駄目だとよく思う。しかし、昔の私だったらこうするだろうなと思いつつも、諦めてしまう。だから、2010年こそは「諦めない私」を「再生」したい。

「諦めない私」を再生するためには、何事にも根気を持って取り組む、これに限ると思う。根気を持って組むこと、それは簡単なことではないと思う。けれど、昔の自分に出来ていたことが、現在の自分に出来ない訳がないのだ。

これから取り組んでいく様々なこと。本格的になり始めた就職活動、すでに出遅れている気もするが、しっかり納得のいく形で終わらせたい。これから1年かけて書き上げる卒業論文、自信を持って卒業論文討論会に臨みたい。早いもので、もうすぐ4年生になる。大学生活最後の1年、やらなきゃいけないこと、やりたいこと、思い残すことないよう、すべてに根気を持って取り組んでいきたい。そして、それが「諦めない私」の「再生」に繋がられるように…2010年頑張ります。

□ついこの前、2009年度のセンター試験（国語）を読む機会があった。その中で、目にとまった文章があったので再生と絡めて述べていきたいと思う。新入生のゼミ生たちの何人かは覚えているかもしれない。その評論文は、子供たちの遊びから考察した管理社会やエゴイズムと相互的共同性について書かれていた。簡単に紹介したいと思う。その文は「隠れん坊・かんけり」と「陣オニ・複数オニ・高オニ・人生ゲーム・テレビゲームなど」を対比させている。前者と後者には一見何の違いも感じられない。あるとすればただ隠れん坊にアクセントを付けくわえただけのようなものに思えてしまうが、筆者はそれだけのことでは全くないと主張している。それは後者に

において、それらのゲームが持つ目的は裏切り・自己保身・高い階層に行くことだという。それらは全て社会秩序の中でのエゴイズムや競争主義を育てるものだと述べている。それに相反するものが前者であるという。“自分だけ”という考えではなく自他ともに協同しなくてはならないことから、相互的共同性に基づいたゲームであると述べていた。そして、それらから興味深いことが述べられていた。エゴイズムや競争主義が根付いている後者は形を変えたとしてもその根源にある世界観は変わらない。しかし、根源にあるものは変わらないが形を変えて子供たちを魅了する。〇〇オニで飽きた子供たちは人生ゲームへ、それに飽きた子供たちはまた他のゲームへと繰り返しの連鎖である。この飽きることの繰り返しの果てには、“飽きることに飽きる”という。それは結局それらのゲームが内包する世界観というのはエゴイズムや競争主義といったものを含んだものであり、その根幹に飽きてしまうのだと述べていた。では飽きることに飽きたらどうするのか。もはや子供たちはエゴイズムや競争主義を根幹に持つゲームというのは受け付けられなく他の世界観・根幹を持ったゲームに移るのだという。それが相互的共同性に富んだゲームだと考察されていた。

少し説明が雑になってしまったが、このような内容が述べられていた。私はこれを読んで、まさに現代を指し示すものであると感じた。競争主義やエゴイズムの螺旋から疲弊し、または飽きたのが今の時代だと思えてならない。やはりそれらと相反する共同性といった「自分だけでなく他者も」というのが今の世の中で求められているのだろう。それを戻すこと、我々のなかに改めて芽生えさせることこそが再生であるように思う。我々がこの一年ゼミを通して考えてきたこと。読書会の本においても全てにおいてこの「ともに」という言葉が重要になってくるだろう。しかし、競争や利己が推されてきた世の中から新しく変化する中で、切り離された自と他の間を繋ぐものがなければならない。それを作り出していくことがまた必要なのであろう。

* * *

□われわれの社会において、それが壊れたり、失われたりした結果、それを再び取り戻さなければいけなくなってしまったものは数多く存在している。われわれは、もう一度それを取り戻すために、さまざまな働きかけや努力をしなければならないが、それは決して本来の意味である、「もう一度同じものが復活する」という意味ではない、と私は考える。

本来の姿・・・たとえば、地球の温暖化のような問題を考えるならば、われわれはどこまで地球を本来の姿まで再生させなければならないのだろうか。人間が生活できるレベルまでなのか、それとも大昔、すべてを自然が覆っていたようなレベルまでさかのぼるのか。地球の長い歴史の年表を、ある年代に指で指し示すのだとすれば、「もう一度同じものが復活する」という意味では上の二つはどちらも同じ再生だといえる。

社会における「再生」とは、われわれが思っている意味とは多少違うものである。それは、どんな失われてしまった問題に対しても、われわれの社会は、ビデオの巻き戻しができないようにけっして過去に戻ることは不可能なのである。一度失われてしまったものがもう元には戻れない、気づいた時には遅かったと消極的な意見ということではない。われわれは、常に、時とともに歩みをともしなければならないのである。そのため、今われわれが抱えている問題に対して、過去に戻るための努力を行うのでは意味がないのである。

われわれの社会において「再生」をするという工程には本来の再生とは決定的に違った部分が生じなければならない。われわれは過去に戻ろうとするのではなく、過去を振り返り反省をすることによって新たな、よりよいものを創造しなければならないのではないのか。それが社会における「再生」なのではないか。友人とけんかをし、一度壊れた関係が仲直りをして、元に戻ったとした場合、そこには以前の関係ではなく、新たな友人関係が作られているだろう。原因をしっかりと分析し、何が問題で何を改善すればよいのか、そして二度とこのようなことが起こらないためにどういった対策をとればよいのか、それを考えることが新たな「再生」を創造することにな

るのではないか。

□「はじめに、「再生」について考える際に多くの人は何を「喪失」してきたのかを考えた。国境・ラジオ・手紙・忍耐力・記憶力・感動・メガネ・万年筆・ビデオテープ・カセットテープ・ポケベル・東西の壁・・・など我々が失ったものは数知れない。科学の発展とともに我々の生活は便利になり、多くの「新しいモノ」を手に入れ、多くの「古いモノ」を捨ててきた。インターネットは国境を喪失させ様々な「壁」を乗り越えた。そう、我々はありとあらゆる「壁」を失ったのである。

「壁」と聞けば、多く的人是言葉の壁、人種の壁などの鬱陶しいイメージを持つだろう。しかし、鬱陶しいものであるからこそ「壁」は必要なものなのである。あなたは「壁」の大切さに気付いているだろうか。「壁は乗り越えるモノだ。」「壁はぶち壊すモノだ。」そう唱える勇敢なチャレンジャーがいるとすれば大いに結構。困難に立ち向かう勇気と決意は時に必要である。しかし私が唱える「壁」はメタファーではない。決して壊してはならぬ種の「壁」である。「壁」の存在は我々を俗世から乖離し孤立させることを可能にする。世の中から隔離された時、我々は幸福を感じるであろう。世間のしがらみから一時的に開放され、厚化粧した街への服従から解放され、本当の自分であることを許される。「壁」で囲まれた世界とは、すなわち我々に与えられた唯一の自由である。人々は時間に追われ、都市に汚染され、自己に溺れ欺瞞とエゴの塊となっていないだろうか。今、全ての日本国民に鏡を手に取り自身の顔をのぞいてみてほしい。ファンデーションの存在を忘れるほどに化粧を濃くはしていないであろうか、都市にのさばる量産型になっていないだろうか。もし少しでもそれを感じるのであれば、それは自由を満喫できていないということなのではないだろうか。そんな人々に私は声を大にして言いたい、「壁をつくれ」と。

「壁」をつくることは自己の形成に大いに役立つ。「壁」に囲まれることによって自身の位置を再確認し、自分を見つめなおすことが出来る。それを繰り返すことによって確固たる自分を生み出すことが出来るのではないだろうか。それに成功した瞬間に量産型でも厚化粧でもない「自分」になれるのである。

最後に、「壁」に扉を付けるのは忘れないでほしい。扉のない「壁」は刑務所だけで十分である。

□ゼミのテーマが再生になってから、以前よりその言葉を意識するようになり、今は再生という言葉がいろいろなところで使われていることに改めて気が付きました。日本経済再生、地域再生、JAL 再生、リサイクル、再生可能エネルギー…私たちが暮らす現代は、というより、今を生きる私たちは、何かを再生しなければいけないと感じているのだなと思います。再生しなくてはと感じるということは、何かを失い、壊してしまったと感じるから、またはこのままではいけないと感じているからかもしれません。

バイト先のおかみさんに、再生という言葉から何を思いつくか聞いてみると、「ビデオの再生ボタンかなあ。」と返されました。ゼミで取り上げてきた言葉の意味とこの再生の意味は違うけれど、この再生について考えると、映像を記録に残し再生するということは、昔から考えると大変な技術の進歩だと思います。近い将来、車が空を飛んだり、ドラえもんが誕生したり、月に移住したりといった映画のような世界が実現するのかもしれない。進歩していくことは破壊と再生の繰り返しなのではないかと考えますが、今、進むだけではなく再生がこんなにも求められているのは、近代化するなかですぐには取り戻せない大きなものを失いつつあることに気付いたからではないかと思っています。科学の進歩やグローバル化などにより私たちは豊かな生活を手にした

けれど、たくさんものを失ってしまったのではないかと感じます。それは自然であったり、社会の仕組みであったり、心であったり。身近なところで言うと、人間関係もそう言えると思います。以前のような直接的な、向かい合っただけのあたたかいつながりが都市化や携帯電話やネットの発達によって失われてしまったと思います。しかしその中で、ネットを介した新しいつながりなどによって、以前とは違った形であっても再生されていっているのではないのでしょうか。失ったままではいけないから、このように再生にむけて様々な動きが始まっているのだと思います。

最近ニュースサイトで、“日本の未来について、新成人の8割が「暗い」とする一方、自身の未来は6割が「明るい」と思っている。”という記事を見ました。暗いニュースが多い中で仕方がないかもしれませんが、若者が国の未来を暗いと考えてしまうのは悲しいことで、そのような社会は実際に暗いところへ進んでしまうのではないかと危うく感じます。それでも、新成人の6割が自分の未来を明るいと考えているのは、少し能天気じゃないかと最初は感じましたが救いになるのではないかと思います。みんながこのままではいけないと感じて、明るく、未来を変えていく意識をもって考えることができたなら少しずつ良い方向へ行くのではないのでしょうか。失ったものを取り戻す、新たな形にしていくことは難しいですが、微力ながらもこれからの未来をよくするのも、悪くするのも私たち次第なのだと思います。将来の新成人が、日本の未来は明るいと言えようようにしていくことが理想なのではないかと考えます。

□「再生」というキーワードで真っ先に思い浮かんだのは、動物の治癒能力を指す“再生”である。佐藤ゼミのテーマであった再生とは全くニュアンスの異なる意義であるが、私にとっての再生はこのイメージが強い。幼い頃転んで擦り傷ができたとき、数日経つとその傷はかさぶたとなって剥がれ落ちて元の状態へと戻った。私はこのときとても不思議な現象だと感心したのを覚えている。

また、トカゲのしっぽの話聞いたときもびっくりした。トカゲはしっぽを切り落とされても時間が経つとまた新しいしっぽが生えてくるというものだ。人間の腕は切り落とされても新しい腕が生えてくるということはない。トカゲはまるまる新しいしっぽが生えてくるのだからすごい再生能力の持ち主である。

普段私たちががなにげなく見ている映像も元の媒体を再生して見ている、いわば1度失なわれた映像なのだ。映画館で上映されるフィルムもそうだし、CDやDVDのディスクに関しても同様である。生で撮影した映像、生で録音した演奏を媒体という名の棺桶に閉じ込める。しかし閉じ込める側に悪意はなく、むしろ善意を持って閉じ込める。それが人々の手に行き渡り、再生というボタンを押すことによって同じ姿で我々の前に姿を現しているのである。

こう考えると“再生”という言葉はとても神秘性を感じさせる言葉だとつくづく思う。“再生”というのは“再”び“生”まれるから“再生”と書くのである。失ったものをもう一度復元して元の状態に戻すという意味のこの言葉を見ただけで、不思議と人間は心のどこかに希望を感じるのではないだろうか。特に0から新しく生まれるのではなく、1度失ったものを生まれさせるからこそ、この言葉の恩恵は大きいのだと思う。そこにこの言葉の神秘性をより感じる。

ところでつい先日、高校の頃の友人と久しぶりに会う機会があった。彼は大学でサークル活動やゼミ活動に励む傍ら、カンボジアでのボランティア活動にも精を出しているらしい。カンボジアでのボランティア活動は私の想像以上に大変なようである。カンボジアの歴史的背景や地理的条件を把握した上で、カンボジアの人々（子どもも含めて）が一体何を求めているのかをきちんと考えて行動しないと意味のないボランティア活動になってしまうそうだ。子ども達に食料を補給し、壊れた建物の復元作業を手伝うことがそのままボランティア活動に直結しているのではないようだ。彼はカンボジアでのボランティア活動を行うことによって、カンボジアが失ったものを再生させようとしている。0から何かを作り上げようとしているのではなく、失ったものを取

り戻したいという一心で活動しているのだ。

私の大学生生活もそろそろ折り返し地点を迎えようとしている。大学生活では様々な経験を通していろいろなものを得てきた。しかし、それと同時に失ったものも数多くある。昔の自分は持っていたが、今の自分にはないもの。簡単に取り戻せるようなものではなかったとしても時間をかけてでもいいから再生させたい。

□「再生」をテーマにエッセイを書く。何を書こうか考えたとき、このゼミに入って初めての課題「失われつつあるもの」を思い出した。私は直感のままに近所づきあいについて書いた。他の仲間の文章を読み、焦りを覚えたことを思い出す。失われたものを再び取り戻す。「再生」とはつまりこのことだが、最近失ってしまったものは何かあるだろうか。

後期は久しぶりの友人と会う機会が多かった。年末帰省した際にも卒業後初めて高校の仲良しメンバーが全員揃うことができた。このようにして大切な人たちと再会し短時間でも時間を共有することは何にも代えがたい、貴重な時間である。そんな時間を過ごす中でふと、「今日こんなに楽しい時間を過ごしているけれど、いつまでこんな関係でいられるのかな。」と考えてしまうことが多々あった。実際、幼稚園や小学校で毎日一緒にいた子たちとはもう疎遠になってしまっている。本当に寂しいことではあるが、中学・高校・大学とそれぞれ大切な友人と出会うことができた。

しかし、人生で一番大切なものは人間関係だという考えのもと20年間生きてきた私にとって、仲の良かった人と疎遠になってしまうことは残念でならない。では、そんな友人たちとの関係を再生することはできるのだろうか。再生できればそれに越したことはないが、難しいであろう。お互い違う道を歩み、それぞれに'今'という時間の中に生活や人間関係があるのである。そんな風に考えると人生って、人間関係って一体何なのだろうかと悲しくなってしまった。しかし、あるときいきものがかりの YELL という曲を聴いた。この曲の歌詞には「サヨナラは悲しい言葉じゃない それぞれの夢へと僕らをつなぐ YELL」とある。こんな捉え方もあったのかと嬉しくなった。私は過去にばかり気をとらわれていたのかもしれない。お互いの未来に希望を持ち"今'という時間を大切にすればいいのである。そう考えたら、人間関係とは別の道へ進んだら失ってしまうものではなく、「再生」しようとするものではないのかもしれない。いつも「自然体」でいれば良いものなのだと考え方が変わった。

サヨナラは悲しい言葉じゃない
それぞれの夢へと僕らをつなぐ YELL
いつかまためぐり逢うそのときまで
忘れはしない誇りよ 友よ 空へ

YELL いきものがかり

ゴールデンウィークには成人式がある。きっと多くの再会を果たすことができるだろう。寂しいことは考えず、「再会」を自然体に楽しみたい。これからも人間関係を自然に、でも大切にしていきたい。
